

第56回日本小児股関節研究会
会長 北野利夫

先達のご努力により、日本の乳児期股関節脱臼（発育性股関節脱臼）発症率は、約10分の1に減少し、先進欧米諸国並みに改善されました。これは出生直後から股関節の肢位を良肢位（M字）に保つ、すなわち、巻きオムツでなく開排オムツの推奨、コアラ抱っこの勧め、などの股関節脱臼発症予防法に関する育児者、医療関係者への周知が進んだことによります。

しかし、近年、歩行開始後に初めて診断されるなど、診断遅延率が極めて高いことが浮き彫りになってきました。この要因のひとつとして、発症率が劇的に低下したことにわれわれが安堵して、発症予防・早期発見の重要性といったことが十分に周知されなくなったことや、健診体制への財政的、人的関与が低下してきたことが考えられます。言い換えれば、知らず知らずのうちに、新生児・乳児の股関節に対するきめ細かいケアがなおざりになってきたとも考えられます。

全国的に股関節の検診体制の見直しが進んでいます。しかし、その速度を加速する必要があります。股関節脱臼発症の危険性を持つ児の出生は待ってくれません。早急にこの問題を提起して議論を進め、股関節脱臼発症の危険因子を持つ児の発症を予防し、診断遅延を防ぐことにより、子供たちの運動器の発育を正しく導く必要があると考え、このシンポジウムを企画しました。パネルディスカッション「早くみつけてあげたい、股関節脱臼」と2つの講演「乳児期の股関節脱臼はエコーで診断出来る」、「股関節形成不全スペクトラムー乳幼児健診医を惑わす様々な病態とその臨床像ー」を通して、関係者の皆さんと一緒に、この問題を考えたいと思います。